

# 地域美術館の実際と課題

－上越教育大学と小林古径記念美術館との連携事例からの考察－

五十嵐 史帆\*・笹川 修一\*\*・市川 高子\*\*

(平成28年8月31日受付；平成28年11月21日受理)

## 要 旨

地域美術館はそれぞれの地域の個性を踏まえ、その役割を見直す必要があるだけでなく、あらゆる市民に向けて創作活動へ参加、鑑賞体験できる機会を積極的に提供していくことが使命として求められている。

本論文では、このような実態を踏まえ、地域美術館の目指すあり方について考察するとともに、上越教育大学の所在する上越市の公立美術館である小林古径記念美術館を例にあげ、地域美術館の具体的な課題を明らかにし、その課題に対して、教員養成を主目的とする上越教育大学がどのように貢献できるのかを、美術館調査と連携の事例から考察する。

## KEY WORDS

regional museum 地域美術館, teacher training courses 教員養成課程, educational activities 教育普及, cooperation 連携

## 1 はじめに

美術館を含む博物館は、1951年の博物館法の成立によってその定義が定められ、公共的価値をもつようになった。それまでは数も少なく市民の日常利用は不可能に近い状態であったことから、博物館は「存在すること」に意味があったともいえよう。1960年代の設立ブームを受け数が増加し、レジャーや学習など、利用目的が多様化したことにより、博物館は大衆のものとなった。一方、博物館そのものが社会に果たすべき役割や意味が大きく変化し、博物館相互の競合や相対化が進んだ。80年代になると、博物館の持つ対社会的な意味を問われるようになり、「市民に対し博物館がどのようなメッセージを提起することができるのか」という活動内容の質が重要視されるようになった。<sup>1</sup>

2001年に文化芸術全般にわたる法律として「文化芸術振興基本法」が制定されたことを契機に、「文化芸術立国」を目指した振興政策が進められ、博物館・美術館の充実が規定された。また、2015年の「文化芸術の振興に関する基本的な方針」<sup>2</sup>において、我が国が目指す「文化芸術立国」の姿として、「子供から高齢者まで、あらゆる人々が我が国の様々な場で、創作活動へ参加、鑑賞体験できる機会等を、国や地方公共団体はもとより、芸術家、文化芸術団体、NPO、企業等様々な民間主体が提供している」<sup>3</sup>ことが示された。このような法の整備により、博物館・美術館等の運営方針も、これまでの文化財や美術品等のコレクションの保存を中心とした考え方から、それらの積極的な活用へと大きな転換を求めることとなった。

本論文では、このような実態を踏まえ、「地域美術館」の目指すあり方について考察するとともに、上越教育大学の所在する上越市にある唯一の公立美術館である小林古径記念美術館を例に挙げ、「地域美術館」のとしての具体的な課題を明らかにし、その課題に対して、大学がどのように貢献できるのかを事例をもとに考察することで、地域振興と子どもや若者も巻き込んだ文化芸術振興の一助となる提言となることを目的としている。

## 2 「地域美術館」という概念

ここで、「地域美術館」という語について整理したい。布谷知夫によると、「地域美術館」という用語は元々使われておらず、「郷土史料館」「地方博物館」という用語が使われていた。東京博物館（現国立科学博物館）の初代館長で博物館事業の普及のために尽力した棚橋源太郎は、博物館がかかわる場所の広さを手掛かりに、町村単位では「郷土博物館」、群馬単位では「地方博物館」というように用語を使い分けていた。中央の「国」に対しての「地方」であり、それよりも小さいというニュアンスでの「郷土」であり、それ以上の意味はなかったと言える。浜口哲一と小島弘義は「地域美術館にとって不可欠な要素に、地理的条件と地域住民の学習権の保障、さらには館側の理念と体質が

\*芸術・体育教育学系 \*\*小林古径記念美術館

ある」として地域博物館という用語によって地域住民と地域社会の中での博物館の占める位置を主張しようとした。<sup>4</sup>

この浜口・小島以後、「地域美術館」という用語が使われるようになった。これらの理論を整理し、理想とする博物館像として、「地域博物館」という概念をあげた人物に、伊藤寿朗がいる。伊藤は主に二つの論を展開した。一つは、博物館の活動内容の質的变化を時系列で見えていき項目で整理することで、これからの博物館のあり方を示した「第三世代の博物館<sup>5</sup>」という論である。また、伊藤のもう一つの論考として、「博物館の目的」に注目し、その相違によって区分し、博物館がどのように社会に貢献していくかあり方を示したものとして「地域博物館論<sup>6</sup>」がある。これは、博物館を目的別に「地域志向型博物館」（地域美術館）「中央志向型博物館」「観光志向型博物館」の3つの型に区分したものである。地域博物館の主張として、一つは、専門分野ごとの科学的な成果を地域に適用するのではなく、「地域課題を軸」として地域の「新しい価値」を発見していくことであり、もう一つは、博物館と市民の関係性について、博物館は、地域課題についての成果を市民を啓蒙するのではなく、市民自体が主体となって課題に取り組むことができるように支えていくことであると述べた。<sup>7</sup>この伊藤の論考は、理想とする博物館像として、現場に大きな影響を与えた。<sup>8</sup>また、現代においては博物館も多様化しその型で収まりきらない館もある。しかし、この論考が、博物館は地域でどのような役割を果たすべきなのか、さらには、博物館と利用者の関わりが結果として地域をどのように変えるのかということにまで広げて博物館のあり方を考える契機になったといえることができる。

本論では、この対社会的な存在としての「地域博物館」という概念を援用し、小林古径記念美術館と上越教育大学の連携及び他館の活動調査を手掛かりに、美術館が地域や大学とどのように関わることができるのかを考察する。

### 3 小林古径記念美術館の現状と課題

#### 3. 1. 立地と施設について



写真1 小林古径記念美術館外観



写真2 小林古径邸本邸（右）と画室（左）

上越市唯一の公立美術館である小林古径記念美術館は、近年、上越教育大学（学部生や美術コース所属の大学院生）と相互の特色を生かしながら連携活動を実施している。小林古径記念美術館の特徴と大学との連携について述べる。

小林古径記念美術館（写真1）は、上越市出身の日本画家である小林古径の芸術を後世に伝えることを目的に2002年に仮オープンするとともに、同年、美術館整備とともに小林古径の居宅を東京から移築復原オープンした。2005年には美術館が正式開館することに伴い、古径邸を美術館とともに一体的に管理運営することとなった。美術館は、上越市内の高田公園の二の丸地区に位置し、古径の絵画作品や資料を展示する美術館（建物は上越市立総合博物館と共有）の他に、古径の住宅を体感できる小林古径邸（本邸及び画室）とあわせて2つの施設から成り立っている。

美術館の所在する高田公園は、徳川家康の六男、松平忠輝公の居城として築城された高田城の跡であり、全体が新潟県の史跡に指定されている名勝地である。春は日本有数の桜の名所であり、夏には外堀一面に蓮花が「東洋一の蓮花群」として知られており、「観桜会」と「蓮まつり」では多くの観光客を集め、新潟県の上越地域における中心的な観光地としての役割を果たしている。また、高田公園周辺には、他にも図書館や陸上競技場などの文教・スポーツ施設が整備されており、市民の憩いの場として多目的に活用されており、市内外から多くの来園者が訪れる。

美術館では、「古径芸術を伝える」「日本文化を伝える」「人々の豊かな心を育む」ことを目的に、作品収集、調査研究、展示、教育普及などの事業を実施している。年4～5回の展覧会開催のほか、作品収集、ワークショップ（以下、WS）等の教育普及事業を実施している。古径芸術を出身地である上越市で保存することを目的に、古径に関する作品の他にあらゆる資料を収集するとともに、作品や画歴の調査研究の成果を展示を通して公開している。

一方、小林古径邸本邸（写真2）は、近代数寄屋建築の第一人者の吉田五十八<sup>9</sup>が、小林古径の意を汲んで設計し、宮大工の岡村仁三によって、1934年に東京都大田区南馬込に建てられたものを、2002年4月に高田公園内に移築

したものである。その建築学的重要性が評価され、現在は国の登録有形文化財となっている。本邸の隣には画室を再現し、共に一般公開されている。本邸では美術館と合わせた作品展示を行い、画室では茶会や講座を行うなどの事業を展開している。小林古径邸と美術館の2施設は空間的にはやや距離を隔てているが、画家の住宅と画室、美術館を同時に観覧できるという特徴を持っている。

### 3. 2. 収蔵品

所蔵品は、小林古径の本画や初期の素描・模写などを含めて約1,400点の作品と古径ゆかりの品々などの多様な収蔵品で構成されている。本画では、古径が梶田半古に入門する以前に描いたとされる《少女》(写真3)や古径の絶筆《牡丹》(写真4)などがあり、素描作品では様々な古典絵画の模写や人物・植物等の写生画などを所蔵している。また、関係資料では作品に捺された印章や古径の結婚祝いに岡倉天心から贈られた端溪硯などの古径に関する多くの作品や資料を収蔵している。その他に、200点を超える小林古径の代表的作品の原寸大複製画も所蔵しており、展示や出張授業などに活用している。



写真3 小林古径《少女》



写真4 小林古径《牡丹》(絶筆)

### 3. 3. 展覧会開催事業と入館者の傾向

展覧会は年間に4～5回開催している。コレクション展では、美術館の収蔵品である小林古径作品や資料を中心に展示するほか、企画展では古径に関する展覧会を中心に開催している。近年開催した企画展では、「原三溪と小林古径」(2011年)、「小林古径生誕130年記念 小林古径展」(2013年)などの古径関連の展覧会のほか、「旧B S N新潟美術館所蔵品展」(2014年)、「水を見つめて－新潟県立近代美術館・万代島美術館所蔵品展」(2016年)など、上越市や新潟ゆかりの美術作品の展示も行っており、古径だけにとどまらない多様な展覧会の開催に努めている。

入館者の傾向については、来館者アンケート調査(2008～2013年)によれば、年齢構成は50～60歳代が約5割を占め、次いで70歳代と40歳代が多く来館しており、大学生が含まれる20歳代は1割以下である。また、市内・県内・県外からの来館者は概ね同じ割合(市内4割、県内3割、県外3割)で入館している。また、来館目的は、展覧会目的が約6割、観光目的が約2割、公園の立ち寄りの際などのその他の目的が2割となっている。高校生・大学生の入館率は非常に低く、観桜会や蓮まつり、帰省時に利用する以外にはほとんど見られず、美術館利用者の大半はシニア層で占められているのが現状である。

### 3. 4. 教育普及事業

美術館では、現在は様々な教育普及事業を実施している。しかし、2005年の開館当初は作品鑑賞会や講演会の開催にとどまっており、教育普及事業の必要性は認識しながらも職員体制の問題などから教育普及事業を計画的に実施していくことは困難であった。展覧会に関連する講演会や学芸員によるギャラリートークなどは開館当初から現在も継続している。以下、特徴的な教育普及事業について時系列で述べていく。

2007年から小・中学生を対象として、4日間で本格的な日本画を制作する講座「古径の講座」(開始当時は「古径の楽校」と呼称)を毎年開催している。この事業は上越市教育委員会事業の一環として開催されている「謙信KIDSプロジェクト」の一環として開催されている事業であり、上越教育大学の日本画を専門とする教授及び学生を講師に、美術館で作品を鑑賞した後に、日本画材に触れるため古径邸画室を会場として掛軸に日本画制作体験を行う講座である。古径が作品制作した画室を活用して日本画を描くという学校では体験できない講座として、小林古径記念美術館の特色を生かした事業であることから、毎年募集定員を上回る希望者がある。この講座を機縁として、上越教育大学との連携を徐々に行うようになった。



2011年から緊急雇用創出事業特例基金事業補助金を活用して開始した伝統文化体験講座「和(わ)ーくしょっぷ 遊んでアート!」を機縁として、計画的な教育普及事業を充実させてきた。この事業は、古径が日本の古典絵画を研究した上で近代的な感覚を取り入れ、「新古典主義」とよばれる芸術性に到達したことに因み、日本画をはじめ筆や能、和菓子作りなど日本の伝統文化を気軽に体験してもらうことを目的とした年6回の講座である。小学生から一般まで、講座によっては0歳児からを対象とした講座も開催し、美術と言う枠組みにこだわらず、幅広く日本の伝統文化を紹介した。また、「視る」「聴く」「味わう」「描く」「触れる」の五感を働かせて日本文化の奥深さを感じてもらうとともに、これまで美術館を利用したことのない市民に対しても美術館や古径邸にも親しんでもらう動機となることを期待した。各講座ともに市民からの関心は高かった。このWSを開催する際には、上越教育大学から補助講師として学生に参加してもらった講座も設けた。また、事業の一環として作成した、古径が使用していた日本画材にならって集めた「日本画体験キット」を活用して、学校や公民館活動等で日本画を気軽に体験する「アート体験プログラム 遊んで☆日本画」を実施した。なお、2014年の補助事業終了をもって「和(わ)ーくしょっぷ 遊んでアート!」は終了となったが、現在は展覧会の関連イベントに組み入れた事業や上越教育大学との連携WSなどに昇華し、美術館に親しみ、古径の芸術性に対して理解を深められるような教育普及事業を展開している。

### 3. 5. 美術館の特性と課題

小林古径記念美術館は、約20万人が暮らす地方都市・上越市が唯一設置している公立美術館でありながら、規模的にも十分であるとはいえず、近年の入館者数は低迷している。そして何より、上越市民に対する知名度および市民の利用率は高いとはいえない。生涯教育という観点から、あらゆる世代の市民に利用してもらうことが理想であるが、中学生から利用する機会は減少し、高校、大学、そして社会人になっても美術館の利用頻度は依然として低いままである。当館が収集・展示している作品が主に「日本画」であることも理由のひとつかもしれないが、来館層は50～70歳代が約7割を占めている。

小林古径記念美術館は、その名が示す通り、「小林古径」という近代日本画壇を代表する画家を顕彰し、作品他を紹介する館の性格から、開館当初は伊藤寿朗の言うところの「中央志向型」及び「観光志向型」の折衷的な美術館としての機能が強く出ていた。2章で述べたとおり、美術館が地域に果たすべき役割そのものが年々変化しているにもかかわらず、その変化の波に乗れずいつの間にか市民が求める美術館と乖離していった。3章4で述べたように、近年は市の教育委員会の施設として教育普及活動にも力を入れている。つまり、現状の小林古径記念美術館は、「地域志向型」へ舵を切りながらも「中央志向型」「観光志向型」の2つの型も混在している状況であるといえるだろう。

## 4 調査の事例

小林古径記念美術館が、市民に愛される美術館として再生していくために、他館からそのヒントを得ることができるのではないかと考え、2016年1月に他館の活動調査を行った。調査先を選定するにあたり、①上越市と同規模の地方都市に位置していること、②公立美術館であること、③特定の作家名を冠に付けた「個人美術館」であること等の条件を踏まえ、「平山郁夫美術館」(広島県)、「奥田元宋・小由女美術館」(広島県)、「浜田市世界こども美術館」(鳥根県)の3館を調査先とした。それぞれの館が地域とどのような方法で関わっているのか、事例を見ていく。小林古径記念美術館と訪問先美術館の基本データは表1に示した。

表1 美術館の基本データ

館名	開館	設置者(人口)	管理者	年間入館者数	地域連携の方策
小林古径記念美術館	2005	新潟県・上越市 (19.7万人)	上越市教育委員会	約3万人	・地元大学との連携 ・市内学校への出張講座
平山郁夫美術館	1997	広島県・尾道市 (14.5万人)	公益財団法人 平山郁夫美術館	約6万7千人	・瀬戸田町住民・小学校、地元大学との密接な連携 ・瀬戸田町における観光・文化面の拠点施設として機能
奥田元宋・小由女美術館	2006	広島県・三次市 (5.4万人)	公益財団法人 奥田元宋・小由女美術館	約7万人	・充実したボランティア制度 ・キャンパスメンバーズ制度 ・小学校見学のためのバス無料借上げ
浜田市世界こども美術館	1996	鳥根県・浜田市 (5.6万人)	公益財団法人 浜田市教育文化振興事業団	約5万人	・ボランティア制度の活用 ・「ミュージアムスクール」「ホリデー創作活動」でリピーターを獲得

#### 4. 1. 1 平山郁夫美術館

平山郁夫美術館（写真5，6）は、平山郁夫の出身地である広島県尾道市瀬戸田町に1997年に開館した。設置が瀬戸田町（現 尾道市）、公益財団法人平山郁夫美術館が指定管理者として運営にあっている。小林古径記念美術館との共通項としては、日本画家の個人美術館であることと、直営と指定管理者との違いはあるが、地方の公立美術館ということであろう。以下、特徴的な取組みを記す。

- ・大学生の来館者は全体的に少ないものの、尾道市立大学芸術学部との交流が深い。大学が瀬戸田で行うアートプロジェクトの拠点として美術館を活用するなど、美術館が地域と大学とをつなぐ橋渡しの役割を担っている。また、美術館側も作品解説の英訳を大学に依頼するなど、連携はお互いにとって良いものになっている。
- ・ボランティア制度や友の会は設置していないが、地域の有志がコンサートの補助やチケット販売に協力している。一方で、美術館の研修室や喫茶室が地域の交流の場として機能している。
- ・隣接する瀬戸田小学校との連携が強く、児童は必ず小学生のうち2～3回は美術館に見学に訪れる。開館以来「平山郁夫美術館賞」を全国の小学生を対象に行っており（美術館と中国新聞社主催）、保護者とともに自分の作品を観に訪れる子どもたちも多い。



写真5 美術館エントランス



写真6 平山郁夫展示室

平山郁夫美術館は、開館当初から瀬戸田における観光・文化面での拠点となるよう求められてきた経緯がある。ボランティア制度や友の会はなくとも、館の職員と地域住民との直接的なコミュニケーションが図られている。また、近隣の大学や小学校と連携することで、保護者や教員を含む地域住民を巻き込みながら、瀬戸田町になくてはならない美術館として地域に存在感を示していることがうかがえる。

#### 4. 1. 2 奥田元宋・小由女美術館



写真7 講座やコンサート行方ロビー



写真8 ボランティア室

広島県三次市にある奥田元宋・小由女美術館（写真7）は、2006年に開館した。設置が三次市、公益財団法人奥田元宋・小由女美術館が指定管理者として運営を担っている。平山郁夫美術館と同様、日本画家の名前を冠する個人美術館である。地域住民の力を「ボランティア」として組み込みながら、市民に愛される美術館作りに役立てている。以下、地域住民との連携について主な取組みを紹介する。

- ・ボランティア制度をもうけ地域の人々と連携している。作品監視や庭の手入れ、広報、イベント実施等に協力してもらい、研修制度も充実している。各グループにリーダーを置きある程度自主的な運営を実現している。
- ・「キャンパスメンバーズ」制度を実施している。大学に有料で登録してもらい、学生と教職員が何度でも無料入館できる制度。この仕組みで大学生が来館しやすくなった。

- ・市内小中学生の見学のため、バスの無料借り上げを行っている。全学校（30校程度）の約3分の1が来館している。バス代は教育委員会で予算計上し、利用申し込みがあれば、教育委員会と連携を取ってバスを手配する。
- ・夏と冬の2回子ども向けの展示を行う際にWSを実施し、制作した作品を美術館で展示する。親子で来館してもらうことを目的としている。

奥田元宋・小由女美術館が開館以来進めてきたボランティア制度は丁寧な組織作りが重要な要素となる。安定した活動のための「ボランティア室」（写真8）や充実した研修制度はもちろん、学芸員を始めとする館の職員との日頃からのコミュニケーションが大切である。一朝一夕にはできないかもしれないが、将来的に美術館の活動をともに支え、理解してくれるボランティアの存在は、これからの美術館活動にとって大きいものになると感じられた。

#### 4. 1. 3 浜田市世界こども美術館



写真9 体験コーナーがある展示室



写真10 創作室（活動の様子）

最後に、教育普及分野で非常にユニークな取り組みを続けている館を紹介したい。鳥根県浜田市にある浜田市世界こども美術館である。設置は浜田市、公益財団法人浜田市教育文化振興事業団が指定管理者として運営にあっている。ターゲットは、館名にある「こども」である。この館が対象とする「こども」とは「乳幼児も含めた小学生まで」であり、「こども」が親しみを持てるような展示内容や充実した体験コーナー（写真9）などの工夫がなされ、実際に小学生とその保護者が来館者の約8割を占めている。また、「世界」という館名にもあるように、美術館を通じて国際的な交流を行うことも使命としている。特徴的な取り組みは以下のとおりである。

- ・浜田市内の全小学校が美術館で半日「鑑賞＋創作活動」をして過ごすプログラム「ミュージアムスクール」を実施している。その都度、学校のニーズを聞きながらプログラムを設定する。バスは浜田市で持っているスクールバスで、児童を送迎したあとのバスを有効活用している。前年度のうちにすべての学校のスケジュールを調整。ミュージアムスクールは入館無料、そして次回の無料券も渡している。
- ・土・日・祝日にWS「ホリデー創作活動」を必ず実施。創作室（写真10）等で行い、週ごとに内容が変更され、100～300円の材料費のできるものを行う。基本は学芸員が指導にあたるが、ボランティアが指導することもある。
- ・ボランティア制度「美・すけっと」を実施している。美術館スタッフの補助的役割を担う。
- ・夏に行う「美術館まつり」ではボランティアだけでなく、美術館をよく利用する子どもの保護者が自発的に屋台運営に携わることもある。

この美術館では、文化庁のグローバル拠点施設事業として、数年にわたって海外の指導者との交流を続け、海外の子どもたちの作品を展示する「アンデパンダン展」を実施している。常にローカルな視点とグローバルな視点の両方を持つことで、展示や催しに新鮮な魅力を持ち続けている。約20年続いている「ミュージアムスクール」で来館した子どもたちが、その後、保護者とともに訪れ「年間パスポート」を購入したり、休日ごとに創作活動に参加したりと、確実にリピーターとなっている。子どもを中心に据え、学校や家庭、地域住民によるボランティアが一緒になって美術館活動を活性化させている例である。

#### 4. 2 調査事例をふまえて

今回の調査事例を振り返り、学ぶべき取り組みはたくさんあるものの、各館の特色や環境によることも少なくない。地域との関わりの中で当館がいかに活動を活性化していけるのか、実行できそうな取り組みをまとめると、次のような事例が参考になると思われる。

1. 地域住民の力を生かしたボランティアの活用。
2. 美術館利用の仕組み作り。（特に、学校側が利用しやすいプログラムを用意すること。）



3. 「キャンパスメンバーズ」を採用し、近隣大学との連携を図る。

「学校」と言っても、幼・小・中・高等・特別支援学校の「授業」に限定せず、広い視野で受け皿を意識し、乳幼児の見学や部活動、放課後児童クラブの利用など、潜在的なニーズにも目を向けながら、教育普及事業を展開していく必要性を感じている。また、小林古径記念美術館の特性を踏まえ、さらに活動内容を充実させていくためには、地域住民との連携が不可欠である。美術館訪問調査から得られた事例3点について、大学と美術館の連携等の今までの試みを振り返り、成果と課題について考察する。

## 5 地域美術館における教育普及事業の実践に向けての提案と課題

### 5. 1. 1 地域の力を生かしたボランティア活用

調査した館のボランティアの活用例は、「作品監視」や「コンサートの補助」「チケットの販売協力」などの補助的な役割が多く見られた。それ以外に、「庭の手入れ」「茶会の開催」等のボランティア自身の特技を生かした活動も見られた。しかし、職員不足を補うための労働力を目的としたボランティアの活用については、人選、育成、運営等、美術館職員の負担が増えることの懸念が調査館から指摘されており、新しいボランティアのかたちを模索する必要がある。

### 5. 1. 2 これまでの事例からの提案

上越教育大学と小林古径記念美術館では、これまで幾度となく連携によりWSを行ってきた。そのうちの一つ「Let's 絵の具大研究！」(2011)(以下「絵具WS」)は、小林古径記念美術館の出張授業「日本画絵具で遊ぼう」(2011～現在)(以下「絵具出張授業」)へと発展した。この事例から考察する。

「絵具WS」は、美術コースの院生4名が中心となって企画・実践を行った。日本画家・小林古径という美術館の特性に合わせて、岩絵具を参考に簡略化した絵具作りを通して、学校では学ぶ機会の少ない岩絵具や日本画、さらには小林古径記念美術館に興味を持ってもらうという趣旨のもと考案されたWSである。この「絵具WS」の実践に至るまでには、実に3ヶ月以上の時間がかかっており、美術を専門に学ぶ学生が、材料の収集や選択、道具の選別や工夫など、試行錯誤の教材研究の末に一つのWSとなった。

一方、「絵具出張授業」は、小林古径記念美術館の出張授業の定番メニューの一つである。小学校や中学校からの要望に応じて学芸員が学校に行き行って授業を行うものであり、その中でも、「絵具出張授業」の要望は増加傾向にある。そして、「絵具出張授業」は、「絵具WS」を基にして発展させたもので、使用する道具(金床、篩、軍手、ゴーグルほか)(写真11)や、「絵の具を砕く際に、砕いた粉が飛び散らぬよう厚みのあるビニールに入れて叩く」(写真12)、「グループで活動し、各グループで出来上がった絵具をその場にいる皆共有する」など、基本の活動は共通している。



写真11 美術館出張授業（授業の材料）



写真12 絵の具WS（袋の中に入れて叩く）

異なる点として、「絵具WS」では、身近なものから絵具が作れることを導入に活動に入っているが、「絵具出張授業」では、導入で「岩絵具による絵画」と「油絵具による絵画」の現物を提示し違いを確認してもらったり(写真13)、前述した美術館オリジナルの資料「日本画体験キット」(写真14)を提示したりしている。また、「絵具WS」では、顔料の展色剤を子どもにより身近材料である化学糊を使用しているが(写真15)、「絵具出張授業」では膠を使用する(写真16)など、日本画を専門とする美術館の特性を生かしてより充実した内容になっている。



写真13 美術館出張授業（美術館資料を活用した導入）



写真14 小林古径記念美術館の日本画キット



写真15 絵の具WS（化学糊で溶く）



写真16 美術館出張授業（膠で顔料を溶く）

WSや授業をスムーズに行うためには、材料や技術、作品に関する知識だけでなく、道具や材料の吟味、時間配分、人員配置など、多くの検討事項がある。しかし、多くの職務を抱える学芸員や美術館職員にとって、時間をかけて上述したようなことを検討する時間を十分確保することは難しい。したがって、「絵具WS」で実践された活動をスムーズに進行させる活動や細かい支援の方法などを、そのまま「絵具出張授業」として引き継ぐことで短い準備時間で熟慮された活動を計画することができる。一方で学生にとっては、WSなどの具体的な造形活動を企画し、子どもたちを前に実践を行うことで、教材研究から実践までの一連の流れを経験し、教員になる上での重要な学びとなる。それだけでなく、場所の設定や美術館ならではの約束事、参加者の募集や参加者・保護者との関わりなど、美術館の協力を仰ぎながら解決しなければならない問題も多く、実習とはまた違った貴重な経験となる。

つまり、大学と美術館（学生と学芸員）が、互いに不足する部分を補いながら、実践を積み上げていくことで、互いの共有の財産（例えば、絵具作りの活動を実施するスキル）とすることができる。また、それぞれの専門性に合わせて発展させることも可能である。相互にとって有益な連携となっている。そのためには、「質の良い」WSを企画し教材案として提供できるよう、学生の美術館への興味をかきたてることのできるような工夫や、WSを熟慮する際の丁寧な指導など、美術館と大学がそれぞれの方法で学生に働きかけ支援していくことが重要で、今後の課題でもある。

### 5. 2. 1 美術館利用のための仕組み作り

浜田世界子ども美術館では、「乳幼児も含めた小学生まで」を対象としており、小学生とその保護者が来館者の約8割を占めている。その特性から、常に何かのWSが行われており、子どもたちは遊びにくる感覚で美術館を利用している。また、子どもを美術館に呼ぶことで、その親世代をも美術館に関心を持ってもらうことが考えられる。「地域美術館」としての方向性を考えるならば、このような仕組みも検討する必要がある。

### 5. 2. 2 これまでの事例からの提案

調査館では、定期的WSのための専門のスペースとともに専任のスタッフが常勤していた。小林古径記念美術館ではこのような常勤スタッフを置くことは難しいが、本学の授業で学部1年生がWS補助を務めた事例から実現の可能性を探る。ここで補助に入った学生は、学部1年生で美術コースの学生ではなく、専門的な美術教育を受けた学生ではないため、美術の技術的な指導は難しい。しかし、教員養成課程という本学の特徴とその環境から子どもへの対応力の高い学生が多く、子どもの活動を見守ったり、自然な形で関わったりすることができていた。（写真17, 18）





写真17 学生の補助（子どもの活動を見守る）



写真18 学生の補助（子どもと談笑）

また、活動後の学生のレポートには、「子どもの可能性を知った。私の感性のななめ上の想像できない考えを持っていて、やはり、個を見ないといけないと思った。」(学部1年生F)、「子どもたちは難しい話をしている時はそれぞれわけていたけど、2, 3階へ絵を見に入って説明している時は、なんだか楽しそうだと感じました。学芸員さんの鑑賞時の言葉がけはすごく参考になりました。」(学部1年生K)、「子どもが「意味わかんない」と言ってしまったので、その後はわかりやすい言葉を並べて説明することができた。子どもたちにより積極的にはしかけることができた。」(学部1年生H)等の感想が見られ、学生にとっても、学ぶことの多い活動となった様子が読み取れる。<sup>10</sup>

本学の学生の特性を生かし、同時に教員としての学びの場するためには、事例のような一回性の活動だけでなく、子どもの変化や成長が読み取れ、子どもとの関係を構築していくことができるような継続的・日常的な活動の場を作っていくことも考えていきたい。例えば、放課後などの時間を利用した活動である。また、活動のリーダーや指導者としての育成も視野に入れる必要がある。伊藤が、「地域課題への取り組みは、地域に生活する人びとの、知恵と協力がなければ不可能である」というように、学生をはじめとした地域の知恵を美術館活動に活用し、ともに成長しているような実践として積み上げていくことが今後の課題である。

### 5. 3. 「キャンパスメンバーズ」の採用

奥田元宋・小由女美術館の「キャンパスメンバーズ」制度は、現在は県内公立大学1校が法人会員となっており、会員である大学が会費を支払うことによって、学生は常設展・企画展を無料で観覧することができる。この制度は、若者の入館者を増やす具体的な事例であり、参考になるものである。全国で見ると他にも同様の制度があり、地方の美術館一つで実施しているものとしては、北海道立近代美術館の「近代美術館キャンパス・パートナーシップ制度」<sup>11</sup>がある。また、東京の複数の国立近代美術館等5館による「国立美術館キャンパスメンバーズ」<sup>12</sup>や、東京都美術館ほか6館による「東京都歴史文化財団 パートナーシップ」<sup>13</sup>等、複数館で構成され多くの大学が会員となっている大規模な連携もある。特に、地方の美術館で実施されている事例は、十分参考となるものであり、上越市内の他の大学や専門学校と等を視野に入れて検討することは可能であろう。

ただし、調査した奥田元宋・小由女美術館が課題としていたように、大学が会員となっただけでは学生の美術館利用の増加は見込めない。また、「国立美術館キャンパスメンバーズ」のように複数館で構成されている制度と異なり、一つの館との連携では、学生が日常的に多くの美術館に親しむようになるのに限界がある。したがって、制度導入の際には、ゼミや授業単位で美術館を使用したり、美術館の資料を活用するような課題を設けたりするなど、大学側が学生に対し美術館に関心を向けるような支援を行っていくとともに、それを契機にして学生自らが主体的に美術館に足を運び活用するような自学自習の姿勢を育てることも必要である。そのような課題について、大学での指導や授業との関わりも視野に入れて制度の導入を検討していくこととする。

## 6 まとめ

人口減少等の日本が直面する課題を解決する際に、個性あふれる「地方の創生」が重要であると声高に言われているが、文化行政はどこの地域も予算が削られ人員も不足しており、公立美術館も同様である。そのような中で、個々がそのあり方を見直していくだけでなく、個別の存在が互いの力を取り込み共に発展していくことも重要となってくる。本稿では、地域文化の中核的存在である大学と美術館が、それぞれの特色・強みを活かした知の拠点として、強固な連携を図ることの実現の可能性を探った。今後は、提案の実現とともに、長期的な見通しを持ち恒常的に取組めるシステムの構築を目指していく。一方、教員養成のカリキュラムに組み込み必修化することで、学生が目的意識を失い美術館で体験が形骸化してしまうことも懸念される。今後も実践を重ねて慎重に検討をしていく。

## 引用及び参考文献

- (1) 伊藤寿朗, 1993, 『市民のなかの博物館』吉川弘文館, pp.135-140
- (2) 「文化芸術振興基本法」に基づいて策定された。(27年5月22日)
- (3) 「文化芸術の振興に関する基本的な方針－文化芸術資源で未来をつくる－(第4次)について(答申)」(2015.5.22)文化庁
- (4) 布谷知夫, 2003, 「日本における地域博物館という概念」, 『博物館学雑誌第28巻第2号(通巻38号)』, pp.67-76
- (5) 伊藤は, 竹内順一(1985)の「第三世代の博物館」の問題提起を土台にして項目の整理を行ったと述べる。(伊藤, 前掲書, p.141 参照)
- (6) 浜口啓一らの提唱(1977)に着想を得たものであると思われる。(金子淳, 2010, 「戦後の日本の博物館学の系譜に関する一考察」, 『博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究 解説編 科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書:平成19年度-平成21年度』, pp.60-61参照)
- (7) 伊藤, 前掲書, pp159-160
- (8) 布谷, 前掲書, pp67-76.
- (9) 吉田五十八(1894~1974年)は, 東京市日本橋区呉服町に生まれ, 東京美術学校(現の東京藝術大学)建築科卒業後, 渡欧。ドイツやオランダの美術学校在学中に, 近代建築運動に失望し, 逆にイタリアで初期ルネサンス建築に強い感銘を受けて帰国。当時行われていた西欧建築の模倣設計に疑問を抱き, 日本独自の伝統建築の重要性を再認識した。数寄屋建築の近代化に専念し, 吉田流といわれる独自の建築様式を完成させた。1946年には東京美術学校教授に就任, 1964年に文化勲章を受章。(上越市パンフレット「日本建築の美－よみがえる近代数寄屋－小林古径邸(本邸)」参照)
- (10) この制度は, 札幌市立大学, 北海道教育大学(札幌校, 岩見沢校)が利用。北海道教育委員会HP(2016.7.30)参照。  
<http://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/knb/kyannpasupatona.htm>
- (11) この制度は, 東京国立近代美術館, 京都国立近代美術館, 国立西洋美術館, 国立国際美術館, 国立新美術館の5館またはその中の1~3館を選択。会員校は2016.5.1現在, 84校。独立行政法人国立美術館HP(2016.7.30)参照。  
<http://www.artmuseums.go.jp/campus/>
- (12) この制度は, 東京都庭園美術館, 東京都江戸東京博物館, 江戸東京たてもの園, 東京都現代美術館, 東京都美術館, 東京都写真美術館の6館。会員校は12校(2016.4現在)。東京都歴史文化財団HP(2016.7.30)参照。  
[http://www.rekibun.or.jp/promotion/partner\\_tenrankai.html](http://www.rekibun.or.jp/promotion/partner_tenrankai.html)

<sup>1</sup> 伊藤寿朗, 1993, 『市民のなかの博物館』吉川弘文館, pp.135-140

<sup>2</sup> 「文化芸術振興基本法」に基づいて策定される。(27年5月22日)

<sup>3</sup> 「文化芸術の振興に関する基本的な方針－文化芸術資源で未来をつくる－(第4次)について(答申)」(27年5月22日)文化庁

<sup>4</sup> 布谷知夫, 2003, 「日本における地域博物館という概念」, 『博物館学雑誌第28巻第2号(通巻38号)』, pp.67-76

<sup>5</sup> 伊藤は, 竹内順一(1985)の「第三世代の博物館」(瀧崎安之助記念館「冬晴春華論叢」第三号 1985)の問題提起を土台にして項目の整理を行ったと述べる。(伊藤, 前掲書, p.141 参照)

<sup>6</sup> 浜口啓一らの提唱(1977)に着想を得たものであると思われる。(金子淳, 2010, 「戦後の日本の博物館学の系譜に関する一考察」, 『博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究 解説編 科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書:平成19年度-平成21年度』, pp.60-61 参照)

<sup>7</sup> 伊藤寿朗「市民のなかの博物館」吉川弘文館, 1993, pp159-160

<sup>8</sup> 布谷知夫, 「日本における地域博物館という概念」, 『博物館学雑誌第28巻第2号(通巻38号)』 pp67-76, 2003.3

<sup>9</sup> 吉田五十八(1894年~1974年)は, 東京市日本橋区呉服町に生まれ, 東京美術学校(現の東京藝術大学)建築科卒業後, 渡欧。ドイツやオランダの美術学校在学中に, 近代建築運動に失望し, 逆にイタリアで初期ルネサンス建築に強い感銘を受けて帰国。当時行われていた西欧建築の模倣設計に疑問を抱き, 日本独自の伝統建築の重要性を再認識した。数寄屋建築の近代化に専念し, 吉田流といわれる独自の建築様式を完成させた。1946年には東京美術学校教授に就任, 1964年に文化勲章を受章。(上越市パンフレット「日本建築の美－よみがえる近代数寄屋－小林古径邸(本邸)」参照)

<sup>10</sup> 28年度体験学習参加者レポートより, 2016.7

<sup>11</sup> この制度は, 事前に大学等が年間観覧料を支払うことにより, 在籍する学生が観覧料を負担することなく, 常設展示の観覧等ができ, 札幌市立大学, 北海道教育大学(札幌校, 岩見沢校)が制度を利用している。北海道教育委員会HP(2016.7.30)参照。

<http://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/knb/kyannpasupatona.htm>

<sup>12</sup> 「国立美術館キャンパスメンバーズ」は, 学校教育において美術館を有効に活用してもらうこと, 学生や教職員の皆様の美術に親しむ機会をより豊かにすることを目的とした, 大学等を対象とする会員制度。利用区分に応じて, 所蔵作品展の無料観覧, 特別展・共催展の割引などの特典が受けられる。対象の美術館は, 東京国立近代美術館, 京都国立近代美術館, 国立西洋美術館, 国立国際美術館, 国立新美術館の5館あるいはその中の1~3館を選択できる。会員校は, 平成28年5月1日

現在で、84校となっている。独立行政法人国立美術館HP（2016.7.30）参照。<http://www.artmuseums.go.jp/campus/>

<sup>13</sup> 「東京都歴史文化財団パートナーシップ」東京都庭園美術館，東京都江戸東京博物館，江戸東京たてもの園，東京都現代美術館，東京都美術館，東京都写真美術館の6館の入館料無料，特別展割引等の特典がある。会員校は，平成28年4月現在で12校。東京都歴史文化財団HP（2016.7.30）参照。[http://www.rekibun.or.jp/promotion/partner\\_tenrankai.html](http://www.rekibun.or.jp/promotion/partner_tenrankai.html)



## Issues and facts relating to regional museums: Considerations from the report relating to the cooperation example of Joetsu University of Education and Kobayashi Kokei Memorial Museum of Art

Shiho IKARASHI\* · Shuichi SASAGAWA\*\* · Takako ICHIKAWA\*\*

### ABSTRACT

The requirement for local art museums is not only to review their role but also, as a mission, to actively provide opportunities for local people to participate in creative activities and experience seeing art based on the individual characteristics of the local area.

In this thesis, the way to achieve the goals of local art museums, based on the current situation, will be considered. At the same time, the specific issues of local art museums will be made clear. One example is Kobayashi Kokei Memorial Art Museum, the only public museum in Joetsu City where the university is located.

Based on surveys of local museums and examples of cooperation, these issues will be considered regarding how this university (where the main objective is to train teachers) can contribute.

The aim of this thesis is to make recommendations, from the above-mentioned considerations, which will serve as an aid for local development and the development of cultural artifacts and art in which children and young people become involved.